

---

# 迎え

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
迎え

【Nコード】  
N2209B

【作者名】  
坂田火魯志

【あらすじ】  
お友達の女の子早智子のお葬式に出た一樹。彼はそこから彼女を連れ戻す為に神社の境内の裏へ向かい。心の温まるお話にしてみました。

## 第一章

迎え

室一樹はこの時ぼんやりとその場にいた。あまり実感がなかった。

「ねえお母さん」

そして黒い服を着ている自分の母親に声をかけた。

「早智子ちゃんどうしたの？」

「早智子ちゃんはね、遠い場所に行ったのよ」

お母さんはそう一樹に言った。部屋の中は線香の香りとお経の聲が支配し、喪服を着た人で一杯であった。一樹はその中でお母さんと一緒に小学校の制服を着てそこにいたのだ。

前には早智子ちゃんの写真が飾られている。黒い縁どりで。そしてその側に早智子ちゃんのお父さんとお母さんがいた。目の辺りをしきりにハンカチで拭いていた。

「遠い場所に？」

「そうよ」

お母さんはまた答えた。

「じゃあ何時か帰って来るの？」

「それは……」

その質問には答えられなかった。思わず言葉を詰まらせる。

「ねえ、どうなの？」

「それはわからないわ」

そう答えるしかなかった。

「けれど。連れて帰って来れたら」

「連れて帰って来たらいいんだね」

一樹はもう一度お母さんに尋ねた。

「早智子ちゃんをここに」

「そうね」

子供だからまだ死だとかそういうことは教えたくはなかった。だ

からあえてぼかして言ったのだが。だがこれが一樹を決心させた。

「じゃあ任せて」

「えっ」

「僕が早智子ちゃん連れて帰ってあげるよ」

「かずちゃん、何を言ってるの？」

お母さんは小声で一樹に囁いた。

「連れて帰るって」

「遠い場所に今から行って来るよ」

それに対して一樹はまた答えた。

「だから。ちよつと御免ね」

「御免つて。ちよつと」

お母さんからぱつと離れた。そして何処かに向かつて行った。

「どうしたのよ、一体」

戸惑うお母さんはもう目に入ってはいなかった。一樹は早智子ちゃんを連れて帰ると言って何処かに向かった。その何処かとは。一樹の家の側にある神社であった。

「確かここに」

一樹は神社に着くと辺りを見回した。そして何かを探していた。彼はここであるものを見たことがあるのだ。それは何処かに通じる穴だった。それも早智子と一緒に。そこに二人で入ったこともあるのだ。

「あの時も中に入って」

その中で不思議な人に会った。黒い服を着た綺麗な女の人に会ったのだ。

「ここから先は今では駄目よ」

「どうしてなの？」

一樹はその女の人に尋ねた。その人の向こうには荒れた何も無い場所だけが見える。人がまばらにとぼとぼと何処かに向かつて歩いているだけであった。

「だって君達はまだここに来る時じゃないから」

「まだなの？」  
「そう、ここは遠い場所だから」  
「遠い場所!？」  
「ええ、そうよ」  
「そうだ、遠い場所なんだ」  
一樹はその女の人の言葉を頭の中で思い出していた。  
「早智子ちゃんはおそこに」  
「そっちの男の子も女の子もね。いえ」  
けれどその人は早智子には違う顔を見せた。  
「貴女はもうすぐこっちに来るかもね」  
「もうすぐですか？」  
「ええ、ひよっとしたら」  
くすりと笑ってこう述べた。  
「こっちに来るかもね。その時は」  
今度は一樹を見て言った。  
「君がすぐにこっちに来るかも」  
「僕が？」  
「ええそうよ」  
また一樹を見て同じ笑みを浮かべた。 d  
「迎えにね。その時はね」  
「!？」  
「また会うことになるわ。その時が来たらまた会いましょう」  
「おばさんはこの人なの？」  
「お姉さんよ」  
早智子の言葉に一瞬ムツとした顔になった。  
「素敵なお姉さん。いいわね」  
「わかったわ、お姉さん。けど私ここに来るの？」  
「人つてのはね、何時ここに来るのかわからないのよ」  
お姉さんはそう早智子に語った。  
「何かの間違いでここに来ることもあるのよ」

「そうなの」

「そうよ。けどそうした時はすぐ戻れたりするから」

「ふうん」

「まあ戻れない場合もあるけれどね。そういう時は諦めなさい」

「よくわからないわ」

「ふふふ、そうでしょうね」

首を傾げる早智子の顔を覗いて笑った。

「けど、覚えておきなさい」

そしてまた言った。

「君がここに来た時に連れて帰る男の子がいたらね」

「うん」

「その子を大事にするのよ。いいわね」

「わかったわ」

「君もよ」

再び一樹に顔を向けてきた。

「助け出した女の子は何があっても信じる。いいわね」

「うん」

一樹はよくわからないままそれに頷いた。

「そうするよ」

「それじゃあ。縁があつたらまた会いましょう」

お姉さんの姿が急にぼやけてきた。荒涼とした場所も同じく急に掻き消えていく。

「それまで。さようなら」

それで終わりであった。二人が気付いた時には境内の裏の草むらの中だった。急に元に戻ったのだ。今までいたのが何処なのか、今一つわからなかった。けれどお姉さんの言葉はよく覚えていた。今も。

「草むらの中だったな」

一樹はそれを思い出して境内の裏手に回った。

「それでそこから」

草むらに入ると辺りを探す。するとそこに大きな黒い穴があった。すぐにその穴が何かわかった。

## 第二章

「よし、ここだ」

一樹はその穴を見て言った。

「この穴の向こうにあの場所があるんだ」

彼は確信していた。

「そしてさっちゃんもそこに。そこから連れて帰ればいいんだ。そうしたら」

早智子の写真の前で泣いている彼女の両親を思い出した。とても悲しそうな顔をしていた。

「さっちゃんのお父さんもお母さんも笑ってくれるんだ。僕のお父さんとお母さんみたいに」

彼の両親は仲がいい。いつも笑顔が絶えない。彼はかなり幸せな家庭にいるとあっていい状況であった。それは今までの早智子の家も同じであったが。

「だから」

彼は決めた。そのまま穴に入る。

「さっちゃん、今から行くよ」

穴の中は真っ暗であった。それでも怖くはなかった。

「僕と一緒に。お父さんとお母さんのところに帰ろうね」

穴の中を進む。暗いのは平気だった。早智子のことばかり考えていたから。

穴を出るとそこはあの荒野だった。草木一本ないところにまばらに人影が見えるだけであった。やはりその人影は何処か一つの場所へ歩いて行っている。一樹はその荒野を見回した。

「参ったなあ」

来たのはいいが何処が何処なのかまるでわからなかったのだ。

「ええと」

「あら」

だがここで声がした。

「あの時の男の子ね」

「その声は」

「ええ、私よ」

あの黒服のお姉さんがそこにいたのだ。気が付くと一樹の側に立っていた。

「おば……じゃなかった」

「素敵なお姉さんね」

最後まで言わずにそう訂正を入れてきた。

「そう、お姉さん」

「まさか本当に来るなんてね」

「さっちゃんを呼びに来たんだ」

「さっちゃん！？ああ、あの女の子ね」

お姉さんにもそれが誰なのかすぐにわかった。

「確か車に撥ねられて」

「遠い場所に行ったって聞いたからここに来たんだ」

一樹は早智子が車に撥ねられたのは知らない。だから遠い場所に行ったという自分の母親の言葉を信じたのであった。そしてここまで来たのだ。

「ここじゃないかなって思ってね」

「ここだと思うの？」

お姉さんはそんな一樹に顔を向けて尋ねてきた。

「本当にここだって」

「だってお姉さんこの前言ったじゃない」

一樹はこう返した。

「さっちゃん若しかしたらここに来るかもしれないって。だから」

「その通りよ」

にこりと笑ってそう返した。

「あの女の子はね、ここにいるわよ」

「やっぱり」

一樹はそれを聞いて思わず顔を上げた。そして朗らかな顔になっていた。

「じゃあ」

「まあ待ちなさい」

けれどもお姉さんはそんな一樹をまず止めた。

「ここはね、凄く広い場所なのよ」

「そうみたいだね」

それは一樹にもわかった。見渡すばかりの荒野だ。それは容易にわかった。

「最後の方まで見えないから」

「見えるものだけじゃないのよ」

けれどもお姉さんはそれも否定した。

「じゃあもつとなの？」

「そう、もつともつと。今君がいる場所よりもずっと広いでしょうね」

「そんなに広いんだ」

「けれどね、ここは今君がいる場所とは違うのよ」

そしてこうも言った。

「あの女の子のところにもすぐに行けるの。どんなに広くても」

「!?!」

「まあわからないのも無理はないわ」

これだけ広くてどうして、と首を捻った一樹に笑ってこう述べた。

「そのうちわかるようになるから」

「何か全然わからないんだけれど」

「少なくとも今はわかる必要はないわ。それでね」

お姉さんは言う。

「あの女の子を君のいる場所に連れ戻したいのよね」

「そうだよ」

その問い掛けには強い返事を返した。

「だからここに来たんだよ」

「そうね、立派だわ」

「立派って」

「ここはね、今君がいる場所とは全然違う場所なのよ」  
お姉さんはそう前置きして説明をはじめた。

「生きていれば本当は来ることが出来ない世界なのよ」

「生きていればって。じゃあさっちゃんは」

「ええ、死んだのよ」

すつきりとした声で答えた。

「一度ね」

「遠い場所に行ったっていうのはそういう意味だったんだ」

「死ぬってことはわかってるみたいね」

「この前お婆ちゃん死んだから」

一樹は答えた。

「じゃあ僕のお婆ちゃんもここにいるんだ」

「そうよ、ここからずっと向こうの場所にね」

「そこに」

「この荒地にはいないけど。そこにはいるわ」

「そうだったんだ」

「それで君が探している女の子だけれど」

「うん」

一樹はそれを聞いて顔を上げた。

「ここにいるの？」

「そうよ、会いたいのよね」

もうこれは聞くまでもなかった。だがあえて聞いた。

### 第三章

「いらっしやい」

そう言うで一樹の手を取った。

「私と一緒にあの娘のところだね」

「さっちゃんは何処にいるかわかるの？」

「ええ、よくわかるわ」

お姉さんには何もかもがわかっていたのだ。

「だってここは。私の居場所だから」

「お姉さんの」

「そう、私はここの番人」

うっすらと笑って言う。

「そしてこの見張り役。だからね」

「何でもわかるの」

「そう、誰がいるのかもね」

お姉さんは一樹の手を握ったまま姿を消した。そして一樹も一緒に。二人が次に出て来たのは川のすぐ側であった。そこには何か多くの人達が集まっていた。

「川!？」

「そう、川よ」

お姉さんは答えた。

「けれどこの川も君のいる場所にある川とは違うわね」

「すっごい大きな川だよね」

淀んだ空の下にその川はあった。青く、沈んだ色をしている。水面は波一つなく静かなものである。沢山の人が入って前に進んで行くのにその波が全く立たないのだ。そして。川の端は何処にあるのかわからない。まるで海のように。

「ここにさっちゃんがいるの？」

「そうよ」

お姉さんはまた一樹に答えた。

「じゃあ今すぐ」

「待ちなさい」

だがお姉さんは川に向かおうとする一樹を止めた。

「どうして？」

「あの娘はまだ川には入ってはいないわ。それに」

「それに？」

「その川に入ったら駄目よ、絶対に」

「どうして？」

「その川に入るとね。戻れなくなるのよ」

「今僕がいる場所に」

「そうよ」

つまりそういう川なのであった。だから今一樹がいる場所にある川ではないのである。

「だからね。気をつけて」

「うん、わかったよ。けど」

「言いたいことはわかってるわ」

お姉さんは内心一樹の一途さに微笑んでいた。だがそれは顔には出さない。

「あの娘でしょ」

「それでさっちゃんは何処にいるの？」

「安心して、すぐ側にいるから」

「側について」

「ほら、あそこに」

ふと少し離れた場所を指差した。川辺だった。

「あそこにいるわよ」

「あつ、本当だ」

見れば本当にそこにいた。早智子がぼんやりとした顔でそこを歩いていた。白いシャツに赤いスカートという女の子らしい服装であった。

「さっちゃん」

「えっ」

ぼんやりとしたままだった早智子はその声に気付いた。そして一樹達に顔を向けてきた。

「一樹君」

「よかった、やっと会えたね」

一樹はにこりと笑って彼女にこう言った。

「心配したんだよ」

「どうしてここに？」

「迎えに来たんだ」

一樹はまた言った。

「迎えに」

「そうだよ、さっちゃんをね」

「私。別に迎えに来てもらうようなことは」

「さっちゃんよね」

だがここでお姉さんも早智子に声をかけてきた。

「はい」

「その川に入るんでしょ？」

「ええ」

お姉さんの言葉にぼんやりとした顔で答えた。

「何かよくわからないですけど入らなきゃいけない気がして」

「その川に入ったらもうお父さんとお母さんに会えなくなるわよ」

「まさか」

「いえ、本当よ」

お姉さんは早智子にこう述べた。その顔は変わらなかつたが口調ははっきりと言い聞かせるものになっていた。それが早智子にもはっきりとわかつた。

「だからね。入ったら駄目よ」

「パパとママに会えなくなるの？」

「そう、そしてお友達にもね」

「一樹君にも？」

「そうよ、ずっとね」

お姉さんは早智子の目を見て語っていた。言い聞かせる様に。その目を見て早智子も何か考えているようであった。

「そんなの、嫌でしょう？」

「うん」

そしてお姉さんの言葉に頷いた。

「私、パパとママも大好きだしお友達も大好きだから」

「一樹君は？」

「一番好き。いつも一緒にいたい」

「さっちゃん……」

思いがけない言葉だった。一樹も頬つぺたを赤くさせる。けれど今はそんな告白に相応しい場所にはいなかった。お姉さんがまた声をかけてきた。

「お話中悪いけど」

「は、はい」

「な、何ですか！？」

二人はあらためてお姉さんと面對した。お姉さんはくすくすと笑いながら二人に対してまた言った。

## 第四章

「さっちゃんはパパとママに会いたいのよね」

「はい」

「そうよね、誰だってそうよ」

お姉さんは早智子のその言葉を聞くとにこやかな顔になった。そして上機嫌で頷いた。

「子供なら。お父さんとお母さんが好きだから」

「うん」

「けれどね、それは子供だけじゃないのよ」

「どういうこと?」

「お父さんとお母さんもね、さっちゃんが大好きなのよ」

「私が」

「そうよ。だから早く帰りなさい」

それがお姉さんの早智子への言葉であった。

「さっちゃんはまだこっちに来ていい時じゃないから。わかったわね」

「それじゃあここから」

「そうよ、帰りなさい」

「その為に僕が迎えに来たんだよ」

一樹も早智子に対して言った。

「さっちゃんをお父さんとお母さんのところにね。だから」

「それじゃあ一樹君」

「うん、帰ろうよ」

一樹の笑みもにこやかなものになっていた。

「僕達の場所にね」

「じゃあ」

「ただ、二つ気をつけて」

「何を?」

「何があつてもそつちに帰るまでその娘の手を離しちゃ駄目よ」「手を」

「そう、そして振り向いても駄目」

「何でなの？」

「ここはね、振り向いたらいけない場所なのよ」

お姉さんの言葉の意味は一樹にも早智子にもわからないものであった。それはどうということなのだろうかと思つた。

「手を離したらね、そのまま川にまで引き込まれるわよ」

「私が？」

「ええ」

お姉さんの顔ににこやかな笑みは消えていた。真剣な眼差しで二人を見ていた。

「それで終わりよ。ずっとね」

「そんな……」

「だから。何があつても離しちゃ駄目なのよ」

今度は一樹に顔を向けて言った。

「絶対にね」

「うん」

一樹はお姉さんの言葉にこくりと頷いた。

「わかつたよ、お姉さん。じゃあ僕絶対にさっちゃんの手を離さないから」

「そうよ、絶対にそうしなさい」

その目は本当に真剣なものであった。その目で二人、とりわけ一樹を見据えながら話を続ける。

「振り向いちゃいけないのは？」

「それも同じなのよ」

「同じ？」

「ええ。今から君達はここからそちらの世界に帰るのよ」

「それはわかつてるけど」

「それはね、この世界から離れること。ここは本当は来ちゃいけない

「い世界なのよ」

「来ちゃいけない世界」

「そう。だから振り向いてはいけないのよ」

お姉さんは一樹に対して語る。

「振り向いたらどうなるの？」

「手を離れた時と同じよ」

「手を離れた時と」

「そう。それでさっちゃんはそのうちの世界には二度と帰って来れなくなるの」

「絶対に？」

「そう、絶対に」

お姉さんの声は一樹に覚悟を強いる様に強いものであった。それはあえて彼にそうさせる為に言っているかの様であった。友達を迎えに来た小さい勇者に対して。

「振り向いたら終わりよ、いいわね」

「じゃあそれも」

「うん」

一樹はそれにも誓った。子供らしく純粹で、それでいて強い眼差しで。彼は誓ったのであった。

「わかったよ僕、絶対に振り向かないよ」

「何があっても？」

「うん、何があっても」

「言ったわね、約束よ」

お姉さんは一樹のその強い言葉と目の光に何かを感じたのであるうか。またにこやかな笑みになっていた。

## 第五章

「何があっても振り向かない、いいわね」

「うん」

「それじゃあ行きなさい、君達の場所に」

「僕達の場所に」

「そうよ、いいわね」

「二人で」

「そう、絶対に二人でね。言っておくけれど」

お姉さんの言葉はまたしても険しいものになった。

「一人で行くことになったら絶対に許さないわよ、いいわね」

「勿論だよ」

（この子）

お姉さんは相変わらず強い声と眼差しの一樹を見て心の中で言った。

（私の今の声にも負けないなんてやるわね）

だがこの言葉は口には決して出さない。

（見所があるわ。やっぱり賭けましょう）

「じゃあ行くのよ」

心の言葉は出さずに険しい言葉のまま一樹に言った。

「何があっても手を離さずに後ろを振り向かない」

「うん、何があっても」

「その二つを守って帰りなさい」

「じゃあ行くこう、さっちゃん」

一樹は今早智子の手を握った。小さく、柔らかい手だった。

「うん、じゃあ一樹君」

「一緒にお父さんとお母さんのところに帰ろうね」

「わかったわ、今から」

「何があっても手を離さないから」

「そして振り向かないのね」

「そうだよ、僕を信じて」

一樹は早智子の目をじっと見詰めて言った。お姉さんに対して向けたのと同じ強く、はっきりとした光を放つ目であった。その目で早智子の目を見ていた。

そして早智子も。一樹を信じる目であった。今二人は互いを完全に信じていた。

「それじゃあお姉さんさようなら」

「さようなら」

二人はお姉さんにぺこりと頭を下げ一礼した。

「色々と教えてくれて有り難う」

「お世話になりました」

「御礼はいいのよ。それにしても」

「何!？」

「私、さっちゃんが羨ましくなってきたわ」

「私が。ですか!？」

「そうよ、側に一樹君がいてくれてね」

今度は優しい笑みになっていた。

「君にも一つ言っておくことができたわ」

「何なんですか？」

「彼を離しちゃ駄目よ」

「一樹君を」

「そうよ、何があってもね。彼と同じで」

「けど私手を握られてるんですけど」

早智子はお姉さんの言葉の意味がよくわからなかった。きよとんとした顔で言う。

「握ってるのは一樹君で。どうして私が離すんですか？」

「それもそのうちわかるわ」

お姉さんは多くを語ろうとしない。

「けれどそれがわかった時に後悔して、なんてことはないようにね。」

だから絶対に離しちゃ駄目よ」

「よくわからないけどわかりました」

何とも変わった返事であった。だが返事をしたのは事実であった。

「それじゃあね」

「はい」

三人はそれぞれ手を振って分かれた。そのまま一樹と早智子は手を繋いでお姉さんの前から離れていく。お姉さんはそんな二人の後ろ姿を眺めていた。

「ああした想いは。ここじゃ無理ね」

二人が少し羨ましいようであった。その証拠に寂しい笑みを見せていた。だがお姉さんにはどうにもならないようであった。ただ二人を見送るだけであった。

二人はそのまま出口に向かって歩いていく。こんなに広い場所なのにどういうわけか出口が何処にあるのか、二人ははつきりわかっていていた。

「もう少しだからね」

「うん」

励まし合いながらその出口へ向かっていく。その間一樹は早智子の手を握っている。決して離そうとはしない。

(ここでさっちゃんを離したら)

彼は心の中で呟く。

(もう二度と向こうじゃ会えなくなるから)

それだけは嫌だった。だから決してその手を離さない。

「いい、さっちゃん」

彼は早智子に対しても言った。

「僕の手を離さないでね」

「うん」

早智子もその言葉に頷いた。

「私何があっても一樹君の手を握ってるよ」

「絶対にね」

「だからね、一樹君」

そして今度は自分から一樹に対して言う。

「振り向かないでね。何があっても」

「わかってるよ」

確かに彼は振り向かない。そのまま出口に向かって行く。早智子の手の感触を確かめながら。だが出口に向かって進んで行くとき次第に辺りが暗くなってきた。そして周りから薄気味の悪い声が聴こえてきた。

## 第六章

「その手を離せ」

「そしてその子を置いていくんだ」

「そんなこと絶対にしないよ」

一樹はそんな声のした方を振り向くことなく言った。

「この手は何があっても離さないから」

「その間にその子が俺達に食べられてもかい？」

「えっ」

一樹はその言葉に思わず立ち止まりそうになった。

「そんな、さっちゃん」

「私はいるわよ」

「そ、そっだよね」

「大丈夫よ、私食べられたりなんかしないから」

「うん、それじゃあ」

「小さな女の子は美味しいよ」

「柔らかくて食べ易くて」

「嘘だ」

一樹はその声を否定した。

「そんなことない。さっちゃんは食べ物じゃないんだ」

「いやいや、食べ物なんだよ」

声達はそれに言い返す。本当に不気味な、地の底から響いてくる

ような声だった。

「俺達にとっては」

「久し振りに御馳走が来たよな」

「今からぱっくりと」

「そして坊やがここから出た時には」

「くっ」

不安になり振り向こうと思った。だがそれは自分で止めた。

「駄目だ、振り向いたら」

「もう後ろには誰もいないのに？」

「あの娘美味しかったなあ」

声達は一樹を馬鹿にするようにして言った。

「ああ、とてもな」

「御馳走様」

「そんな、さつちゃん」

聴こえてくる言葉にぎよっとした。

「食べられちゃったの!？」

「美味しかったよなあ」

「やっぱり生きている娘の味は違うよ」

声は不安になる一樹の心を煽るようにして続けてきた。

「けれどまだ手は」

握っている感触がある。大丈夫だと思おうとした。しかし。

「そのうち手も冷たくなってな」

「まるで鉄みたいになるぜ」

「嘘だ、そんなこと」

「嘘だと思うなら確かめてみなよ」

「そうさ、もういないから」

「振り向けばわかるぜ」

「どうなったのかな」

「振り向けば」

振り向いてはいけない、それはわかっている。けれど今一樹の心は周りの得体の知れない声により散々に掻き乱されていたのであった。とても平衡を保ってはいなかった。

「そこにさつちゃんが」

「いないよ」

「そうそう、もう振り向いてもいいんだよ」

「いないんだからね」

「いないのなら」

仕方がない、そうも思えてきた。

「振り向いても」

「さあ振り向くんだ」

声達はまた一樹に囁きかけてきた。

「振り向けば全部わかるから」

「あの娘がいないのも」

「はつきりわかるよ。ちよつと頭を動かすだけで」

「よおくわかるからね」

「けど……」

振り向いてはいけない。これは約束だった。一樹はその約束を忘れていなかった。そして。それを破っては絶対にいけないということもわかっていた。

迷っていた。けれど約束を思い出した。彼はそれを破ることは出来なかった。若し破れば早智子だけではなくあのお姉さんも早智子のお父さんもお母さんも裏切ることになる。そう思った。だから彼は言った。

「振り向かないよ」

周りの声達に対して言った。

「何があっても」

「もういないのにか」

「いや、さっちゃんはいるんだ」

声に言い返す。

「絶対いる。だって今後もに感じるから」

本当は不安で仕方がない。だがこう言い返して声を退けようとしていたのだ。痩せ我慢でもあった。しかしそれは覚悟のうえの痩せ我慢であった。

「絶対に振り向かないよ」

「振り向かないんだな？」

「そうだよ、決めたんだ」

声の囁きが弱くなっていた。一樹はそれを感じてさらに強く言葉

を発する。

## 第七章

「何があっても振り向かないって。元の場所に戻るまで」

「そうなのかい」

「そうだ、だから僕は負けないんだ」

そして最後に言った。

「さっちゃんを連れて帰る為に」

その言葉を言つと声達は掻き消えた。まるで霧の様に。

「よし」

一樹はそれを見て強く頷いた。そして足取りを速くさせる。

「さっちゃん、もうすぐだからね」

その手を強く握って言う。

「もうすぐお父さんとお母さんのところに戻るよ」

そうは言つてもまだ不安であった。若しかすると早智子は本当に食べられたのかも思っているのも事実だ。けれどそれでも。彼は振り向かなかつた。早智子の為に、約束の為に。彼は振り向かなかつた。

荒地を進んで暗い穴の中に入った。そこもすぐに通り抜け遂に外に出た。

そこは神社の裏であった。彼は何とか元の世界に戻って来たのであった。

「さっちゃん」

ここでようやく後ろを振り向く。しかしそこには早智子の姿はなかった。

「さっちゃん!？」

「安心して」

一樹が驚いて辺りを見回すと後ろから声がした。それはあのお姉さんの声であった。

「お姉さん!？」

「そうよ。ずっと見ていたわ」

後ろを振り向くとそこにお姉さんがいた。そして一樹を見下ろしてにこりと笑っていた。

「最後まで振り向かなかったわね」

「うん」

まずはそれに頷いた。

「それにあの娘の手を離さなかったし。偉かったわ」

「けどさっちゃんは」

「あの娘ならここにいるわよ」

「えっ」

お姉さんがそう言うつと後ろから早智子が出て来た。そして一樹の方に歩み寄ってきた。

「さっちゃん、大丈夫だったの」

「うん、一樹君のおかげで」

「僕のおかげって」

「後ろ振り向かなかったでしょ、だから戻って来れたのよ」

「そうだったんだ」

「うん、そうだよ」

早智子はそう答えてにこりと笑ってきた。小さな女の子らしいあどけない笑みであった。

「それにずつと私の手握ってくれてたよね」

「約束だったから」

「約束じゃなくても握っていてくれたでしょ？」

「それは」

「だって一樹君とても強く握ってくれてたから。ほら」

そして自分の手を見せた。見れば一樹の手の跡が赤く残っていた。

「これが証拠よ」

「証拠なんだ」

「一樹君が私を連れて帰ったことのね。有り難うね」

「う、うん」

「君がこの娘をここまで連れて帰ったのよ」

お姉さんがまた一樹に声をかけてきた。

「立派だったわよ」

「そんな、僕はただ」

「一度決めたことを最後までやるのはね、大変なのよ」

お姉さんはこうも言った。

「何かとね。迷いがあったりして」

「迷いが」

「本当のところ君も迷ったでしょ」

「うん」

この言葉にはこくりと頷いた。

「わかるわ。ああした状況だとね」

「本当にさっちゃんが食べられちゃったと思ったよ」

「でしょうね」

「だからここに帰って来た時も本当に心配だったんだ」

「一樹君……」

「いてくれているかどうか。けれど今ここにいてくれるから」

「ほっとしているのね」

「うん、それに凄く嬉しい」

一樹はここまで言った。

「さっちゃんがいてくれて」

「またえらくストレートな言葉ね」

お姉さんは苦笑いを浮かべてしまった。

「けれど。誇っていいわよ。この娘をここまで連れて帰って来たことには」

「そうなんだ」

「そうなんだじゃないわ。よくやったわよ」

そして次は早智子に顔を向けて言った。

「こつした子はずっと一緒にいてあげるのよ」

「はい」

「そうしたら幸せになれるからね。じゃあ」

お姉さんはそこまで言うかと最後ににこりと微笑んだ。

そしてすうつと姿を消した。それで何処からも消えてしまったのであった。

「いつちやったね」

「うん」

二人はそれを見届けて顔を見合わせて言い合った。

「何か変わったお姉さんだったね」

「そうよね。けれど」

早智子の頭の中にはその変わったお姉さんの言葉が何時までも残っていた。

(絶対に離しちゃ駄目、か)

一樹の顔を見ながらその言葉を思い出していた。

(それじゃあ)

「どうかしたの?」

一樹は自分の顔をじっと見詰める早智子に気付いて声をかけてきた。

「僕の顔に何かついてるの?」

「あつ、うつん」

だが早智子はその言葉には答えず首を横に振るだけであった。

「別に何も」

「そう?だったらいいけど」

そんな早智子の様子に気付かずと言っただけであった。

「じゃあさ、さっちゃん」

そしてまた早智子に声をかけてきた。

「お父さんとお母さんのところに帰ろう」

「うん、そうよね。今ならまだ間に合うし」

「そうだよ。早く早く」

そう言っただけで早智子を急かす。

「帰ってきてお父さんとお母さんを驚かせようよ」

「うん。それじゃあ」

早智子はここで一樹の手を握ってきた。

「一緒にね」

「う、うん」

急に手を握られてキョトンとした顔になる一樹であった。

「それはいいけれど」

「何？」

「もう手は握らなくていいんじゃないかな。だって帰って来ることができたから」

「私は違うの」

だが早智子はこう言って一樹に反論した。

「違うって？」

「ねえ一樹君」

また一樹に言った。

「ずっと一緒にいてね」

「うん。何かよくわからないけれど」

一樹はあのお姉さんが早智子に言った言葉は知らなかった。だからわかりはしない。だがそのうえで彼女に応えるのであった。何なのかわからないまま。

「わかったよ、ずっと一緒にね」

「ええ」

二人は手を握り合っただまま早智子のお父さんとお母さんのところへ戻った。そこでいきなり早智子がやって来て、しかも棺の中には誰もいなかったのだからかなりの大騒ぎになった。だが早智子が戻って来たのは本当だったのでとりあえずは万々歳であった。こうして早智子はお父さんとお母さんのところに帰って来たのであった。

それから早智子はずっと一樹を離さなかった。お姉さんの言葉を守って。一樹もそんな早智子と一緒にいた。二人の小さな恋がやがて大きな恋になる。そこまではまだ二人にはわかりはしないがそれでも二人は小さな恋をはじめた。その手を離すことはなく。

迎え

完

2  
0  
6  
・  
8  
・  
4

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2209b/>

---

迎え

2010年10月8日15時04分発行